俳句の町・与良　たんけんポイントの説明

平成 18 年 3 月版 / NPO 法人小諸町並み研究会

★たんけんマップで番号の場所をみてください。

与良町は、慶長年間（1600 年頃）、仙石氏の時代に、与良平・古宿（現在の南城公園から千曲川までの一帯）、松井など近郷の村々から農民や職人が集められ、小諸の城下町の一つとして形成された。蛇掘川の与良大橋～飴屋小路間（沼田商店）まで、長さ約 415m。

1　熊野神社（今から 300 年前）

今から 800 年ほど前に開かれ、今から約 300 年前の元禄16年（1703 年）にここに移されました。
荒町、与良、南町の産土神（守り神）で、いくさの神様です。
江戸時代に、洪水で大蛇がここに流れつき、お宮の下の大石につきあたり、また流れていったとか。まちの人たちは、「熊野神社の神様が姿をかえてあらわれた」と考えて、いっそうこの神社をだいじにするようになったと言い伝えられています。
この神社や、和歌山県の熊野の神を本宮としています。
熊野の神は、平安時代のころから朝廷や貴族にあつく信仰され、その後、全国各地に社がつくられるようになりました。

2　八幡神社（江戸のはじめころにできた）

今から 393 年前（1608 年）、その時の小諸の領主・仙石秀久が、戦いの神として望月からここにお呼びした神社です。ここには、仙石秀久の鎧も奉納されています。この本殿は、その時つくられた部分がかなり残っていると言われているたいへん古いものです。
「三間社柿葺の流れ造り」という作り方で、屋根の曲線が美しく、こんなに大きな建物でも軒を薄くしているので、すっきりしたデザインであると評価が高い建物です。
境内には樹齢400 年ほどの大ケヤキが並び、四季の表情が豊かです。

3　八朔相撲

戦いの神様である八幡様によろこんでもらうために、江戸時代のはじめから行われているまちの子どもたちの相撲大会です。

この神社の祭日は、昔は毎月旧暦の８月朔日だったので「八朔相撲」の名前がつきました。
江戸時代の中ごろには殿さまも見にきたようで、近くの村や町から豆力士が集まりました。
江戸の相撲のスーパースターだった「雷電為衛門」も、子どものころ、となりの東部町から「八朔相撲」にやってきました。ここでとった相撲が、はじめての試合だったということです。

八朔相撲の「どんす」
土俵入り(相撲がはじまる前の儀式）の時に力士がつける化粧まわしで、絹でできたものを「どんす」といいます。
荒町の旧家は、男の子が生まれると「どんす」を作ったそうです。
八朔相撲には、いろいろな地域から男の子が集まり、その中で体格のいい子が「どんす」をつけて土俵入りをします。

4　瀬戸屋小路

ここは、瀬戸屋と呼ばれていた商家（今は空家）のわきを通る道で、商家の塀がいい雰囲気をつくっています。今はボロボロになっていますが、大きな主屋、蔵、離れの茶室が並んでいて、かつては立派なお屋敷だったことが偲ばれます。茶室からは、与良のまわりの田畑が眺められるようになっています。この、街道の外側に広がる田園風景が、与良の魅力のひとつです。

5　道祖神

瀬戸屋小路の先に、小さな道祖神様があります。

6　長勝寺

その昔は長松寺というお寺でしたが、戦国時代に甲斐（今の山梨県）武田信玄という武将が、ここを通って行くいくさ（川中島の合戦）に勝てるようにと、長勝寺という名前に変えてしまったそうです。
境内には「郷倉」や、いくつかお堂、きれいなお顔の石仏があり、昔から与良の人々の心のよりどころだったことがわかります。

7　薬師堂（長勝寺境内）

病気を直す仏さまを本尊としてまつってある、お堂です。
毎月十二日が縁日で、ちかくの村の人々がおまいりにきて、たいへんにぎわったそうです。
あまりに混雑したので、中にはとなりの人のお尻をつまむいたずらをする者もいたことから、「尻つみ薬師」とも呼ばれるようになりました。

8　郷倉（建物の年 160 才 / 江戸時代後期）

長勝寺の境内にある、江戸時代の与良町の蔵です。
江戸時代には、飢饉といって、その年の天候によってお米があまりとれない年があり、たくさんの人が飢えて死んだりしました。そんな時のために、お米などの食料をためておいたのがこの蔵です。
この蔵は、天保の飢饉（1832 年～38 年）のあとの、弘化元年（1844 年）につくられました。

9　小山家（江戸のはじめ / 約 400 才）

このお宅は、江戸時代に与良の名主をつとめた家で、当時のままの立派な玄関、お庭に面した座敷があります。小諸藩のお殿様がときおり訪れていたので、警戒が厳重です。玄関には中からだけ相手が見えるようなのぞき戸があり、座敷の床の間には、いざという時に殿様が身を隠すための隠し扉や、警備の人が隠れている部屋もあります。
建物の大きさや、三角の切妻屋根、農家に似た部屋割りの形式などの点で、江戸時代初期の城下町の有力町人の家の形式をよく伝える貴重な建物です。
◇戦国期から江戸時代に移る頃、在地の領主（土豪）は大名の家臣（武士）になるか農民になるか（帰農するか）を選んだ。
帰農して城下町に住んだ家は、名字・帯刀を許され、代々「名

主」（庄屋）や「年寄」など町役人を努めた。
◇興良氏は武田信玄に従って高井郡小山郷に進軍し、小山姓を名乗る。17 世紀初めに武士をやめて与良町街道筋に居住。小山家は代々庄屋役を勤めた。明治期には、当主の太郎らが小諸義塾開設に尽力し、叔父の久之助は自由民権運動の理論的指導者中江兆民の弟子として初期の社会主義運動にかかわるなど、近代日本の形成に影響力をもつ人物がでた。
◇屋敷は、切妻造、板ぶきで、道路側に大きな切妻屋根の破風を見せた外観は、町屋の建築としては他に類例の少ない堂々たるもの。
上段の間と玄関は江戸後期に付足したものだが、中央広間や大床のある部屋は建築当初のもの。

10　小山家

虚子記念館の眼下の、ゆるやかな斜面にそった苔むした美しい屋並みが小山家。裏手の田畑に向いた側には農家の蔵や門があり、敷地内に清らかな水が流れ、くるみの大木がある。田園と街の暮らしを合わせ持つ、与良の魅力を伝える建物。

11　銭蔵（旧松屋の敷地内）

家具屋だった松屋の建物の奥にある蔵です。
江戸時代に小諸城（今の懐古園）の西側にあった蔵。「銭」というのは、お金のことで、「蔵」というのは土で塗り固めて燃えないようにして大事なものをしまっておいた建物のことです。この蔵には、石のふたのついたひみつの地下室があって昔はそこに千両箱（お金のつまった箱）をかくしていたそうです。
明治時代になって、小諸城のいろいろな建物が、まちの商人に売られ、銭蔵はここにきました。他にも城の門が、寺の門として使われていたりします。
◇明治初期、小諸藩の廃藩によって藩の財産が処分され、銭倉（藩の金庫）は漆器商家松屋の屋敷内に移築された。中には鉄砲の弾丸、火薬入れの胴乱などがある。

12　江戸時代、木戸があったところ

江戸時代は、蛇掘川にかかる与良橋のまちの側に、木戸と番所がありました。そこで役人が、小諸城下に不審な人や荷物が入ってこないように、見張っていました。

13　翁屋あと（大原遊学ゆかりの家）

江戸時代の性理学の学者。諸国を旅していた遊学は、1831年に与良の翁屋（今の澤屋）に滞在しました。その教えは、具体的な村づくりや合理的な共同生活の方法を伝えるものでした。与良には、遊学を先生とする勉強会ができて、千葉に引っ越してからも手紙などでやりとりをしていました。

14　与良家（400才 / 江戸時代はじめ）

この家は、街道からちょっと奥に建っています。昔からの大地主の農家の屋敷で、屋根は茅葺きですが、現在はその上からトタンでかこってあります。

主屋は草葺き、寄棟造、平入りで、間口11間半（約20m）、奥行５間（約９m））の大きな建物です。民家の表側のデザインは、縁側のない古い農家の形式を伝えており、土壁と障子の配置が美しいです。家の入り口の部屋は、土間という土の空間になっています。雨の時も、この土間で農家のいろいろな作業ができるようになっています。

この家は、少しずつ改造されて現在でも与良さんのご家族が暮らしています。

土間と居間の表側の部分は、建てられた 400 年前のままで、その時の手斧仕上げの柱が残っています。

◇興良家は17世紀半ばの建築とみられる。主屋は草葺・寄棟造、平入りで、間口11間半、奥行5間、正面外観は縁側のない古い農家の形式をよく伝え、土壁と障子で構成される壁面が美しい。部屋の配置は、この時代には、土間に接した部屋は前後2部屋に分かれず一室になっており、広間型と呼ばれる形式が多いが、興良家は、「四間取」の系統に属し、一般農家と違った特色を示している。

15　虚子庵（高浜虚子の住んでいた家）

50 年くらい前、有名な俳句の作家の高浜虚子が、70 才のころに４年間住んでいた家です。
東京の空襲がひどくなった昭和19年に与良に疎開してきた虚子は、小諸の自然や風景の美しさ、与良の人の素朴な人情にふれて、たくさんのすばらしい俳句をつくりました。
そして虚子の俳句の弟子（生徒）が、全国から小諸に訪ねてきたそうです。
今は家を動かしたので庭はありませんが、その時は庭がありました。
外を歩くには寒すぎる信州の冬に、虚子は１時間も庭に面した廊下をいったりきたり「縁側さんぽ」をして過ごしたそうです。
「風多き　小諸の春は　住み憂かり」

16　高浜虚子記念館

高浜虚子の生涯や、小諸にいたころの暮らしやゆかりの人々などを紹介する記念館です。虚子が筆で書いた俳句などの宝物も展示されています。
入館料/一般３００円、小中学生 200 円　　休館日／水曜日

17　大日堂

奥の右側にある「大日如来」という仏さまを本尊としてまつってある、お堂です。
昔の人たちは、このお堂で、気やすく心のなやみをうちあけたり、願いごとをしてお念仏をとなえたりしました。また、近所の女の人たちも漬け物などをもちよってお茶を飲み、世間話しに花をさかせて、心の洗濯をしたのでした。
左側にあるのが、「えんまさま（閻魔大王）」です。この「えんまさま」をまつった十王堂というお堂は、まちはずれの蛇堀川のそばにありましたが、明治時代になった時にこわされてしまったので、「えんまさま」だけがここに移されました。
◇大日如来を本尊とするお堂。十王堂から移された閻魔大王も安置されている。お寺より身近な存在として、心の悩みを打ち明けて願をかけたり、近所の女衆が十九夜念仏とか庚申塚というような講仲間の人たちの集会所としても利用してきた場所である。

18　御岳神社

このたくさんの石は、生塔といって、日本のあちこちの山の神様をまつっているものです。となりの道に面した建物が、御岳神社です。御岳とは、木曽にある信仰の山です。この大日小路は、昔は浅間山の登山道だったので、山の神様をまつっているのかもしれませんね。

19　与良古墳

今から1000年から1500年くらい昔につくられた、お墓です。そのころの村の支配者か、一族の長老のお墓だと思われます。お墓の中には、刀や首飾りなどがいっしょにしまわれていたようですが、今は何も入ってはいません。

◇古墳時代（4～6 世紀）、与良にも水田耕地が拡大し、支配階級の出現により古墳が造営された。山伏塚・芹沢は崩壊、郷土・大日小路（御岳神社）のみ残る。

20　馬頭観音と力石

古い道の辻（分かれ道の小ひろば）に、いくつかの石塔が並んでいます。

真ん中の一番大きいのが馬頭観音で、江戸時代のお殿さまの愛馬の供養のためにお城の中に建てられたものです。明治時代に廃仏毀釈（神道を重んじるために仏像などを捨てる運動）が起こった時に、蛇彫川に捨てられたものを与良の人が拾ってここに祀ったそうです。

力石は、昔、この小路の若い衆が力比べをした石で、重さの違う３つの石が並んでいます。

21　笠石（虚子の句碑）

虚子がよく散歩をしたという道の、浅間山のよく見えるところに、頭にかぶる笠の形をした石碑があります。その上には、次のような句が刻まれています。

「秋晴れの　浅間仰ぎて　主客あり」

22　虚子、藤村の愛した与良の田園風景

高浜虚子は、与良の浅間山に向かう田園の小路を歩くのが好きでした。
花が咲き、水が流れるのどかな路、与良の人たちとあいさつをかわす路、そこからたくさんの俳句が生まれました。

「蓼科に 春の雲今 動きをり」
「煎り豆を お手のくほして 梅の花」

また、島崎藤村もこのあたりの田園風景や村の人を、「千曲川のスケッチ」という本に書いています。
「火山の麓にある大傾斜を耕して作ったこの辺の田畠はすべて石垣によって支えられている。その石垣は、今は雑草の葉で飾られる時である。石垣と共に多いのは、柿の木だ。黄勝な透明な、柿の若葉にかげを通るのも心地がよい。」